

| | |
|------------------|---|
| Title | 三條西家本 榮花物語(三條西公正校訂, 岩波文庫) |
| Sub Title | |
| Author | 武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1931 |
| Jtitle | 史学 Vol.10, No.2 (1931. 6) ,p.170(328)- 172(330) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310600-0172 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

其他多くの報告、記事がある。しかしながら舊郷土研究が斯界の王座を占めてゐた十數年前と異つて、すでに類似の雜誌も數種刊行されてゐる今日、それらにはまた夫々独自の境地があるにしても、昔の光輝ある歴史を保ち、新しき復活の意義を充分に發揚するためには、編輯者の倍舊の努力をこひねがはざるを得ない。

(松本芳夫)

標註古風土記 出雲

(栗田寛纂註
大岡山書店發行)

最近古典研究のさかんになつて、從來比較的閑却されたかのごとき觀のあつた古風土記が、次第に研究されようとする傾向のあらはれたのは注意すべきことであつて、すでに松岡靜雄、井上通泰、倉野憲司諸氏の播磨風土記に關する論著が公にされた。がそれにつけても栗田寛の標註古風土記が古風土記研究において最も重じられてゐることは、いまさることはいふまでもないことである。さきに常陸の部が複製され、今また出雲の部が複製されたことは誠によろこびに耐えない。さうして前者と同じく栗田寛の纂註に對して、後藤藏四郎氏が補註を加へられたものである。後藤氏はすでに出雲風土記考證の著があつて、出雲風土記研究の一方の權威であるから、本書の價値は更に加はるものと言はねばならぬ。(松本芳夫)

三條西榮花物語

(三條西公正校訂
岩波文庫)

榮花物語は御堂關白道長の榮華を中心とせる宮廷生活の敘述を

旨とした貴重な歴史的文學である。著者が多種多樣極めて複雑な雲上の日常生活をよく把握して、之れを文學的に記述した處に、その特徴があり、又伊勢物語や源氏物語の後に公にされたにも拘らず、獨得の地位を保持する所以であらう。

我が國史並に國文學史の上、不朽の人物である三條西實隆公の後裔にあたる公正氏は、今次、實隆公以來傳襲の榮華物語を校訂上梓せられた。寔に學界のため欣喜すべき慶事である。同本は十七冊本で、初め十冊は大本、鳥の子の類を纏めて冊子となし、後七冊は小本、斐紙を胡蝶糊にしたものであり、其の筆致並に料紙等より推定して、大本は王朝末期頃の筆らしく、外題に榮花物語と書かれ、小本は鎌倉中期を下らぬ書寫の如く、外題に世繼と書かれ、又大本は明瞭に三人位の分寫で、小本は一手であること云ひ、現存同本中最古のものに稱せられ極めて貴重なものである。

本書の傳來は實隆公の日記、永正六年十一月四日に「榮花物語十七冊」と手入の記事と思はるゝものが見え、八日に「榮花物語代冊全」と、又永正八年三月十日に「榮華物語吉々年物百今日遣之」と、又永正八年九月五日に「兼又榮花春今日終一覽切……」と、猶ほ文龜三年九月五日に「兼又榮花物語、續世繼本有沽却本東山殿御本也共以美麗、尤所望之物也」とあつて、恐らく永正六年入手のものを指すものと思考せられる記事も見え極めて、由緒正しきものなる事が推考せられる。

從來、この物語は著者一人説と二人以上説とがあり、又其の分界を三十帖となし、其れ以前を上巻、後を下巻として居るが、公正氏はこれに對して、本書巻頭の解説中に於て、新説を試みられ

て、二十帖を以て限界とせられて居る。この説は参考すべきもので、其の大要を左に摘録する。

三條西本を資料として少しく考究したい。何處迄も外見に囚はれるやうだが、その限界を大本と小本とに置いてみたい。即ち二十卷説を假定してみたい。この新しい假説では如何に説明せねばならぬか、榮花物語は、皇室の御繁榮の次第を叙するのが目的ではなく、たゞこの殿の御前の御榮花のみこそを述べ傳へんとして努力した物語で、中心は道長にあるべきである。かく考へつゝ二十卷を熟讀するに、この卷では道長は既に出家入道し、その室倫子は六十賀を迎へた様が敘述されてゐる。云はゞ道長夫妻の榮花は此處に一段落を附けたものと見るべきである。この後に於ける彼の生活は、何んぞ云つても餘生を樂しむ隱者のそれに過ぎぬ。従つて榮花物語敘述の本來の目的からは漸次遠ざかり行くものと考へられる。又第二十一卷以後第四十卷迄の三十帖の内容を研究するに、其處では主として道長の子孫の事を敘述してゐる。従つて是も亦元來の目的とは多少意味が異なる。此處に於て思ひ合せて考へたいのは、三條西本が第二十一卷以後を世繼と名づけてゐる事である。世繼とは從來の説がどうあらうとも余は世繼を道長の世繼と解すべきものと信ずる。かく解する事によつて各卷と内容との一致を見る事が出来る。かく信する時今は顧みられない木下幸文の下編世繼説の捨て難さを知るが余は三十卷下編説を奉ぜぬ處に彼と見解を異にせねばならぬ。余は此處に二十卷説を提示して諸賢の御叱正を仰ぎたい。二十卷説が又第一卷の月の宴に云へる「此の國の帝

六十餘代にならせ給」云ふに、決して矛盾しない。三十卷説と同じく第二十卷は後一條天皇の御宇に相當する。○中元來榮花物語は二十帖に附された名様であつたが、その續編が世繼と云ふ名で公にせられて行つたが、後に大鏡を世繼と云ふやうになり、次第に混同して終に世繼の名は榮花物語の續編（本來の名稱）からすら遠ざかつて、全く別物語の一名となつたと考ふべきである。それと同時に元來榮花物語なる名稱は余が此處に云ふ正編即ち榮花の卷のみの名であつたのが、續編即ち世繼の卷に迄及ぶ事となつて榮花物語四十帖と傳へられるやうになつたと考へられる。従つて嚴密な意味での榮花物語と命名されるものは、第一卷から第二十卷迄の二十帖を指すのではないかと推定する。

かく論究されて、後崇光院の看聞御記を引用されて居る。同御記を子細に點檢するに、永享四年六月二十七日に「自内裏世繼可有觀覽之由被仰下之間、且、二十帖進之」又七月四日に「内裏世繼殘二十帖進之……」とあるによりて、この世繼は合計四十帖で、大鏡でない事は明白であるが、公正氏の云ふ上編二十帖を先づ進獻し、次いで後日下編二十帖を進獻したものと見るか、それとも單に、四十帖を便宜上二等分して進獻したものと見るか、興味あるものであるが、余は前考を取り度いと思ふ。猶ほ同御記によりて少くとも永享當時までは榮花物語を公正氏の云ふ下編の名稱なる世繼を以て全名稱とした事が推測せられやう。

序で乍ら、公正氏は、足利時代史研究上貴重なる資料たる前記實隆公記を目下印刷中で、本夏中には學界に提供せられる事と思

はれる。寔に重々の努力邦家の爲め慶賀せざるを得ない。

(昭和六年三月十日。武田勝藏)

A History of the English People (1815-1914)(Histoire du Peuple anglais au XIX^e siècle), by Élie Halévy.

外國人の著書によつて、却てその國の文化の眞實を傳へらるる場合は、吾等の屢次遭遇するところである。歴史や制度を取扱つた著書に於て、殊に爾うである。本國人には、その國人固有の僻見とか、黨派心とか、或問題に對して自由研究を許されぬ束縛とかがある爲、公正なる學的批判を下し得ないからである。これに反して、外國の研究者には、概して言葉の不便があり、且その對象國の風俗習慣に通曉せぬことから、その本國人ならば、無教育者であつても、容易にインステイメントで解ることまでも、研究に苦心せねばならぬ代りに、その判断は公正であり、自由であり、僻見と黨派心から免かることが出来るのである。

茲に二三の例を取る。北米合衆國の政治制度を論じたものでは、今日尙ほブライス卿の American Common-wealth が最大傑作である。イギリスの憲法政治を説いたものでは、勿論特殊の方面を取扱つたものでは、それ以上の述作はあるにせよ、矢張りハーヴァート大學總長ロウウェル博士の Government of England を凌駕する著作は看出されない。英國人ポドレーの France が第十九世紀のフランスの政治史及び政治制度に關する最良書の一つである

やうに、ランタンの Englische Geschichte vornehmlich im 17 Jahrhundert は今尙ほ十七世紀の英國史に關するカーンリナーである。吾等は近年完結せられたマンメンの歴史家 Élie Halévy の Histoire du Peuple anglais au XIX^e siècle 『十九世紀英國民族』に於て、以上と同じ例を看出するのである。

十九世紀の一般英國史に關する著作としては、從來 Herbert Paul の History of Modern England や Spencer Walpole の History of England —— 殊に後者が最も優れた作を認められてゐた。我が讀書界に一時可なり廣く讀まれたイッカマンの History of Our own Times や、それ程でもなかつたが、History of the Four Gorges & of William IV. は、文章が流麗で、人物評や個人的話譚に富み、一寸讀んでは面白けれぬ、政黨的色彩が濃厚で、史實の詮索も頗る杜撰の謗りを免かれない、然るに、アレグザンダーの『十九世紀英國民族』の英譯が公けにせらるるや、イギリスの専門學者は一齊に本書を以て、十九世紀英國史の最良作だと推賞して措かなう。殊に Graham Wallis は、本書(英譯本)序文に於て No one would, I think, claim that they have approached Mr. Halévy either in the width of their range or the depth of their detailed knowledge を稱讚してゐる。是等の讚辭が決して外國の學者に對する通り一片のお世辭でないことは、吾等が本書の内容を點檢して、十分にこれを認むるところである。

著者はその緒言に於て、彼の英國史研究の態度を宣明してゐる。それに據ると、彼は専門的論文に依るよりも、矢張り綜合的研究法を擇んでゐる。彼は「先づ第一に英國史の格段なる方面又は特